様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ００６６８

研究課題名（和文）フランス語圏における「パトワ（patois）」概念についての歴史・地理横断的研究

研究課題名（英文）Cross-historical and cross-geographical study of the concept of 'patois' in the Francophonie

研究代表者
佐野　直子（SANO, Naoko）

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：３０３２６１６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究によって明らかになったのは特に以下の2点である。第一に、15世紀には意味不明な発声（個人や動物含む）を指示していた「パトワ（patois）」概念が、「言語（langue）」に「生きた（フランス語など）／死んだ（ラテン語など）」の区別が導入された際に、「生きた言語」の規範から外れる言語行動を名指す概念に変容し、17世紀に広く定着したこと。第二に、フランス語圏の境界地域に「パトワ」概念が拡散されようとした際、言語呼称としての固有名詞化（フランコプロヴァンサル語地域）、「方言」概念化（ベルギー）、侮蔑的呼称として拒否（カタルーニャ語地域）など、多様な受容（または受容拒否）が起きたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年、社会言語学の分野において、ソシュール以来の「言語」概念の体系性などが疑念に付され、「言語」という枠組みを超える人々の言語行動をどのように分析するか、という議論が盛んになっている。その中で、フランス語圏で「言語」の対概念として成立した「パトワ」概念の形成と歴史的変遷、地域ごとの変異を明らかにすることで、「言語」概念自体の揺らぎと政治性と問い直すことが可能になる。

研究成果の概要（英文）：The present study reveals two points. First, the concept of 'patois', which had indicated unintelligible vocalisations (including individuals and animals) in the 15th century, was transformed into a concept to name 'crude' or 'broken' linguistic behaviors that deviated from the 'living language' norm when the 'living (e.g. French) / dead (e.g. Latin)' distinction was introduced for 'language (langue)' in the 17th century, and that it became widely established. Secondly, when the concept of 'patois' attempted to diffuse into the border regions of the French-speaking world, various acceptations (or rejections) occurred, including its properisation as a linguistic designation (Francoprovencal region), its conceptualisation as a 'dialect' (Belgium) and its rejection as a pejorative designation (Catalan region).

研究分野：社会言語学

キーワード：パトワ　「言語」概念　方言　概念の歴史的変容　概念の地域差

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近代言語学の端緒となったソシュールの『一般言語学講義』においてフランス語の langue（言語）が、langage/parole との対比において研究対象として提示されたことはあまりにも有名である。この三分法をどのように訳し分けるかに世界の言語研究者が腐心してきた一方で、近代言語学の研究対象を、広漠とした langage の中から抽出された自立した体系としての langue に絞り込んだことについて、20 世紀後半以降、社会言語学研究は異議を唱え続けてきた。近年は、translanguaging 論など、従来の langue の枠組みを超えた人間のコミュニケーションを研究しようとする潮流も生まれている。

しかし、フランス語圏において、「言語（langue）」がもう一つの対概念を持っていることは、フランス語圏外の学術界のみならず、フランス語圏の研究者にすら、ほとんど意識されていなかった。すなわち、フランス語圏内における言語活動を実地調査する際に多くの研究者が直面する、インフォーマントからたびたび発される「パトワ(patois)」という概念である。「近隣の(共通語を使用する)人々よりも文化や文明度が劣っていると普通は考えられている、農村など一般に少数の人々によって使用されている地方の局地的ことば（*Le Grand Robert* 2001）」と、辞書においてすら侮蔑的な含意を隠さず説明されているこの概念は、フランス語以外の言語に翻訳することが非常に難しい。村ごとの話しことばの微細な特異性を提示すると同時に、集合名詞としても使用されるために数え上げることはできず、話者たちにとっては固有名詞的にも使用される。あえて乱暴にまとめれば、「言語（langue）の名に値しない言語活動全般」を指示する概念と言える。

その差別的含意と指示対象の曖昧さから、特に 20 世紀後半以降は、「パトワ」は学術的概念としての使用を忌避され、「方言（dialecte）」と言い換えられてきた。また、フランス革命期に、フランス語という「国語（langue nationale）」使用の全般化のために全国の「パトワ」を撲滅すべきとされて以来、長らくフランス語普及の「障害」として問題視された一方で、これらの「パトワ」とされたことばを「言語」として保存・保護しようとする活動は、「パトワ」の呼称を否定することで活動の正当性を主張した。そのため、現在も多くの話者自身が自らの使用していることばを「パトワ」と呼んでいるにもかかわらず、「パトワ」概念そのものを検討する研究は非常に遅れている現状があった。

２．研究の目的

フランス語圏における「言語(langue)」の理念が、近代の言語ナショナリズムや国民国家 形成、そして近代言語学の成立に与えた影響の大きさを考えれば、「言語／パトワ」の二分法や 「パトワ」概念の特異性を研究することには大きな意義がある。したがって本研究は、フランス語圏ではありふれた、しかしきわめて特異な「パトワ（patois）」概念の生成・定着・変容・衰退を歴史・地理横断的に明らかにすることで、多層化・断片化する現在の言語状況をとらえるにあたって限界が指摘される「言語」という学 術的・社会的枠組みを問い直すことにある。

地理的変異については、特にフランス語圏の周辺・境界地域での「パトワ」概念の使用に注目する。フランス語圏の「中央」での「言語／パトワ」の二分法が、境界地域で他言語との共存状況の中に持ち込まれた時に、「パトワ」概念がどのように解釈され、受容、または受容拒否をされるのか。その比較検討をすることで、「言語」概念の多様なありようもまた浮き彫りになるからである。

また、「パトワ」概念はフランス語圏の周辺地域を超えて使用される実例もある（カリブ海など）。このような現象についての探索をしつつ、日本語圏における「言語／方言」や、特に沖縄地域における「くとぅば」といった概念などとの比較検討をしていくことで、各地にある言語行動を記述する二分法の比較を現地の研究者や活動家との交流の中で行う。

３．研究の方法

「パトワ」概念の生成と定着、その拡大については、17 世紀～19 世紀のテキストをもとに議論していく。17～18 世紀はフランス語という「言語」規範の定着期であり、数多くの辞書が作成されてきた。辞書類の版を重ねる過程での見出し語や説明の変化を追った。また、18 世紀後半から 19 世紀からは、各地の言語状況が学術的関心のみならず、娯楽的な書物でも言及され、さらには時として政治問題となって議会で議論されたことから、地理的変異においては、それぞれの地域の文献などを中心に検討した。

現代社会の「パトワ」概念の検討については、コロナ禍もあり十分に進められなかったところもあるが、特にフランコプロヴァンサル地域において話者へのインタビューを行い、この言語の呼称の多様さとその使い分け認識についての調査を行なった。また、イタリアのピエモンテ地方アルプス国境地域、すなわちオクシタン語とフランコプロヴァンサル語の境界地域での研究交流や活動家との交流を行い、現地の状況についてのインタビューを行なった。

４．研究成果

(1)「パトワ」概念の歴史的生成と変遷

まず、「パトワ」概念の歴史的変化については、それぞれの資料を持ち寄りつつの研究会合を実施し、その意味内容の変遷が明らかとなった。

16 世紀以降、フランス王国の周辺地域であり、のちに「フランコプロヴァンサル語」という「言語」の名称がつけられたサヴォワ地域近辺において、「パトワ」という呼称が使用されるようになり、17 世紀のフランス語単一言語辞書が作成される頃には、広くフランス語圏に定着した。その際に注目されるべきは、langue と patois の見出し語項目の説明文の変化である。1606 年刊行の辞書においては、patois の見出し語がない一方で、langue の見出し語の説明においては、具体的な言語名として古典語（ヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語など）と並列してスペイン語やフランス語などの名前が挙げられていた。しかし 1640 年以降刊行の複数の辞書において、古典語を「死語（langues mortes）」、整備されつつあったヨーロッパ各地の言語を「生きた言語（langues vivantes）」として区別する説明が現れ、それと並行する形で patois の見出し語が現れる。ここにおいて、フランスの中世後期からの、威信ある書記言語ラテン語と俗語の対立、そして俗語内部（特に文学語として権威のあったオック語とオイル語）の対立状態において、フランス語は一方で「生きた言語」として「死んだ言語」であるラテン語との対立において自らの地位を提示し、他方で「フランス語」にふさわしくない日常的な言語行動を「粗野な」「崩れた」「下層民」のことばとして、「パトワ」の名の下に排除することで、「生きた言語の規範」という矛盾を解決したのである（佐野直子 2020）。

このように成立した「言語」、すなわちフランス語圏におけるフランス語は、「首都」の「立派な人々」のみで話され、それ以外の言語行動は「パトワ」とする、という「位階制」が確立したことで、「パトワ」は、個人単位の言語行為（時としてフランス語が理解できない異言語話者たちの言語行動も意味した）から、広く日常の言語活動全般まで指示することになった。「言語」がそれぞれの書記規範に基づいた、名前をつけて数えられる存在であると認識された一方で、「パトワ」は名詞の形態それ自体には単数複数の区別すらなく、しばしば無冠詞で固有名詞のようにも使用された。

しかし「パトワ」の指示内容もまた徐々に変化していく。18 世紀になると、dialecte の概念が、古代ギリシャ語の借用語としつつも徐々にフランス語圏で使用されるようになり、パトワがその類義語とみなされる傾向が現れる。すなわち、「パトワ」とは地域ごとの固有性を持つ言語変異であるということである。フランス革命の際に国内にある「パトワ」の存在が政治問題化され、グレゴワール神父の「パトワを撲滅しフランス語の使用を全般化する必要性と方策についての報告書」（1794 年）が提出された際には、パトワは、その（古い）地域名が付されて数え上げられる存在となっていた。そして、この報告書がニースのジャコバン派によってイタリア語に翻訳された際には、「パトワ」は、イタリア語の dialetti（rozzi, particolari）と訳されている（糟谷 2022 発表）。グレゴワールの報告書の時点では、数え上げられた「パトワ」の中には、バスク語や低地ブルトン語、ドイツ語方言のアルザス語なども含まれており、必ずしも、ある言語の下位区分変種としての「方言」の意味とはみなされていなかったところが伺える（佐野直子 2021）。しかし、このような「地域ごとの固有性を持つ言語変種」という認識が進むにつれて、「パトワ」の「崩れた」という含意は、フランス語などとの接触によって「純粋」な状態から「退化」してしまった言語行動を指示するようにもなっていった（佐野直子 2020）。

フランス語圏においては、むしろ「方言（dialecte）」より早くから「パトワ」概念が定着し、18 世紀以降、地理的空間への関心が高まるにつれて、類義語としての「方言（dialecte）」との対比が意識された点、「パトワ」概念が地理的変異への意識へと変化した一方で、諸言語間の位階性意識を、蔑視された言語行動としての言語混淆も含めて保持し続けたことについては、今後さらなる精査が必要だが、重要な研究成果である。

(2)「パトワ」概念の地域的変異

上記のように、その指示内容を変遷させつつもフランス語圏における言語状況を記述するのに欠かせない概念となった（その存在の大きさが政治問題にまで至った）「パトワ」であるが、その定着の過程で、かなりの地域差があることが明らかになった点も、大きな研究成果となった。

① ベルギーの事例：「方言」化

19 世紀初頭以降、ロマンス諸語に対する文献学や方言学研究が展開する過程で、「パトワ」概念は「方言」へと近づき、フランス語圏の位階意識の勢力下にあるロマンス諸語を指示する概念へと徐々に収斂していく（佐野直子 2021）が、この変化がもっとも劇的な形で展開されたのが 19 世紀のベルギー議会であった。1830 年の独立当初、ベルギーにおける公用語はフランス語のみであり、地域によって異なる「パトワ」がある、という、厳格な位階意識が存在していた。そこでは、ワロニー地方のことばも、フラーンデレン地方のことばも、等しく「パトワ」なのである。しかし、この位階意識が、ベルギー（とオランダ）というフラーンデレン語圏に持ち込まれたとき、フラーンデレン地域の議員は、その位階意識を「フラーンデレン語内」に適用して対抗することになる。すなわち、フラーンデレン地方の「パトワ」は、オランダと共有するフラーンデレン語という「言語」の「パトワ」だ、という主張である。「パトワ」は普通名詞として、とある言語の下位区分としての「方言」の含意を強く提示することになった（石部 2022 発表）。

② フランコプロヴァンサル語地域の事例：「固有名詞」化の包摂と分裂

フランス語圏の境界地域において、「パトワ」概念を受容するということは、もともとは他者の言語行動として侮蔑的な含意を持って使用されていたこの概念を、自らの言語行動を指す「自称」として使用するということである。しかしそれが、自らの言語行動に対する軽蔑的な認識をも受容することを意味するとは限らない。地元に固有の言語変種に対する愛着の意識を込めてあえて使用し続ける面も見られることが、現代の「パトワ」概念の大きな特徴でもある。

このような愛着意識が顕著なのが、フランス・イタリア・スイスにまたがるフランコプロヴァンサル語地域である。単に 3 カ国にまたがるだけでなく、多言語国家スイスの「スイス・ロマンド」地方、イタリアのアオスタ自治州とピエモンテ州のアルプス山間部、サヴォイア王国としての歴史への強い誇りがあり、フランスへの併合も 19 世紀と遅かったサヴォワ地方、古くからの交通の要衝地であり言語の混淆も起こりがちであったリヨン〜ブレス地方など、その内実はさらに多様である。そして何よりも、これだけ多様な歴史意識を持つ地域に共通の「言語」がある、という認識は、19 世紀末になってから主張されたのであって、話者たちにとってもっとも一般的に使用される自らの言語変種の呼称が「パトワ」であり続けている点が大きな特徴となっている（佐野彩 2023）。フランス国内においては、「パトワ」という呼称が「非-言語」を含意することを知りつつも、「我々」意識を高める概念として好んで使用される傾向がある（佐野彩 2022 発表）。さらに、イタリアとスイスにおいては、軽蔑的な含意を受容せずに「パトワ」という呼称を用いている傾向があり、イタリアではこの呼称の固有名詞化が見られた。

2022 年夏にイタリアのオクシタン語地域での講演会やフィールドへの視察を行い、研究者や活動家と交流した結果、「パトワ」の固有名詞化は、イタリアのオクシタン語地域にも見られる現象であることもわかった。「パトワ」概念を受容することがすなわちフランス語圏にある「言語／パトワ」の二分法による位階制を受容したことを意味せず、そのヴァナキュラーな価値を称揚し、他言語との多層的な競合における抵抗を意味することがあり得る。ただし、「パトワ」という単語の汎用性の高さは、一方で「それぞれの村ごとに異なるパトワ」という分裂意識を生み出す一方で、「パトワ」とされたフランコプロヴァンサル語とオクシタン語の境界意識は生み出さず、そこに区別意識がないことも明らかとなった。

③ フランスカタルーニャ語地域の事例：受容拒否

一方、「パトワ」という概念を徹底して拒否した興味深い事例として、フランスのカタルーニャ地域（ルシヨン地方）がある。この地域のカタルーニャ語に「パトワ」という単語を当てはめて呼ぶことは、事実上の侮辱行為とみなされている。2004 年にはラングドック・ルシヨン地域圏長であったジョルジュ・フレッシュが、当地域の地域言語であるオクシタン語とカタルーニャ語を「どちらもラテン語のパトワだ」と発言したことが、数千人のデモが組織されるほどの激しい反発を呼び起こし、当時のフレッシュの地域圏名変更案を取り下げる結果となった（佐野直子 2022 発表）。

これほどまでに激しい反応を喚起するのは、ルシヨン地方の「境界地域」としての言語状況の複雑さによるものである。フランスに併合されたのが 1659 年と比較的遅かったルシヨン地方は、カタルーニャ地域としての歴史的自覚をその後も保持し続けた。ルシヨン地方では「カタルーニャ語は文法を持ち、辞書をもち、文学作品を持つのだから、一つの言語である」という言説が、現在でも幅広く定着している。その一方でルシヨン地方のカタルーニャ語は、バルセロナのカタルーニャ語とは異なる変種として、やや蔑視される傾向もあった。

さらにフランスとスペインのそれぞれの公用語としてのフランス語・スペイン語はもちろん、歴史的にも言語的にも極めて類縁関係が強いオクシタン語との接触がずっと続いてきた。南仏ではオクシタン語話者の自称として「パトワ」が定着しており、互いによく似たロマンス諸語の混淆状況を「パトワ」と名指されることで、ただでさえ区別が難しいオクシタン語と同一視されかねないという意識があった（佐野直子 2022）。ルシヨン地方の話者たちは、「パトワ」という呼称を拒否することで、言語としての境界を保持したと言える。

以上の地域的変異が明らかになった以外に、研究を進める過程でスペインのアラゴン語地域やイタリア北東部、さらにはマカオにおいてもその事例があることが確認された。これらの地域の「パトワ」概念の使用の定着の歴史などについては、今後の検討課題となるだろう。また、フランス語圏における「言語／パトワ」の二分法と揺らぎに類似するような概念の連関が、他の言語圏、特に日本語圏でも確認できるかどうかは、研究開始当時からの問題意識でもあり、そのための国際シンポジウムの開催も計画していた。しかしコロナ禍で研究計画の変更を余儀なくされ、その後の事故繰越申請却下もあって、この点に充分な成果が得られなかったのは残念である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 佐野直子	４．巻 53
２．論文標題 フランス語圏における「パトワ」概念の歴史的変遷と「言語」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ロマンス語研究	６．最初と最後の頁 103-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐野直子	４．巻 54
２．論文標題 近代フランス語圏における「パトワ」と「方言」概念の変遷	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ロマンス語研究	６．最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐野直子	４．巻 55
２．論文標題 フランス語圏における「パトワ」概念の広がりと断絶 －ルシヨン地方（北カタルーニャ）における patois 概念の受容拒否－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ロマンス語研究	６．最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 SANO, Aya	４．巻 78
２．論文標題 Revitalisation du francoprovencal et conscience linguistique dans l’aire francoprovencale francaise	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Nouvelles du Centre d’Etudes francoprovencales "Rene Willien"	６．最初と最後の頁 55-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 糟谷啓介	4．巻 14
2．論文標題 「ひとは聞きたい話しか聞かない――聴衆の欲望について」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 一橋大学大学院言語社会研究科紀要『言語社会』	6．最初と最後の頁 426-440
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/31251	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐野彩	4．巻 14
2．論文標題 「フランスのサヴォワ地方における言語運動とフランコプロヴァンス語の捉えかた ――1970年代から90年代初頭を中心に」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 一橋大学大学院言語社会研究科紀要『言語社会』	6．最初と最後の頁 378-391
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/31254	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 糟谷啓介	4．巻 13
2．論文標題 参照枠としてのイタリアの「言語問題」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 一橋大学大学院言語社会研究科紀要『言語社会』	6．最初と最後の頁 440-456
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/30311	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐野直子	4．巻 3
2．論文標題 「声と言語、録音と人生」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『語りの地平』	6．最初と最後の頁 140-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 佐野直子
2．発表標題 近代フランス語圏における「パトワ」概念の変遷と「方言」
3．学会等名 日本ロマンス語学会第58回大会（オンライン）、2020年5月
4．発表年 2020年

1．発表者名 佐野直子
2．発表標題 フランス語圏における「パトワ」概念の広がりと断絶：北カタルーニャにおける patois 概念の受容拒否
3．学会等名 日本ロマンス語学会第59回大会（オンライン）、2021年5月
4．発表年 2021年

1．発表者名 佐野彩
2．発表標題 フランスのフランコプロヴァンス語地域における言語運動と言語の継承
3．学会等名 第84回多言語社会研究会（オンライン）、2020年12月
4．発表年 2020年

1．発表者名 佐野彩
2．発表標題 「フランコプロヴァンス語圏のブレス地方における「パトワ」の再活性化」
3．学会等名 日本ロマンス語学会第60回大会（オンライン）、2022年5月
4．発表年 2022年

１．発表者名 石部尚登
２．発表標題 公用語との関係からみたベルギーにおけるパトワ概念
３．学会等名 第92回ベルギー研究会 2022年9月
４．発表年 2022年

１．発表者名 KASUYA Keisuke
２．発表標題 Classificazione sociale del linguaggio e ideologia linguistica nel caso del Gregoire e del Manzoni
３．学会等名 LO JAPON RESCONTRA L'OCCITANIA : Difusion e variacion de la paraula PATOIS Espaci Occitan, Dronero
４．発表年 2022年

１．発表者名 ISHIBE Naoto
２．発表標題 Multiplicite de sens du patois et influence de la situation sociolinguistique dans les debats au Parlement belge au XIXe siecle
３．学会等名 LO JAPON RESCONTRA L'OCCITANIA : Difusion e variacion de la paraula PATOIS ; Espaci Occitan, Dronero
４．発表年 2022年

１．発表者名 SANO Aya
２．発表標題 Conscience linguistique et notion de patois dans l'aire francoprovencale : le cas de la Bresse
３．学会等名 LO JAPON RESCONTRA L'OCCITANIA : Difusion e variacion de la paraula PATOIS ; Espaci Occitan, Dronero
４．発表年 2022年

１．発表者名 SANO Naoko
２．発表標題 La paraula patois s ’ es fermaa a las Corbieras: la demarcacion entre occitan e catalan
３．学会等名 LO JAPON RESCONTRA L ’ OCCITANIA : Difusion e variacion de la paraula PATOIS ; Espaci Occitan, Dronero
４．発表年 2022年

１．発表者名 佐野直子
２．発表標題 フランス語圏における「パトワ」概念の歴史的変遷
３．学会等名 日本ロマンス語学会(2019年5月25・26日)
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 佐野彩	４．発行年 2023年
２．出版社 三元社	５．総ページ数 436
３．書名 「フランコプロヴァンス語」は存在するか―フランス・イタリア・スイスの国境を越える言語の再活性化と言語意識：フランスの地域を中心に	

１．著者名 糟谷啓介（中井亜佐子、小岩信治、小泉順也編著）	４．発行年 2022年
２．出版社 小鳥遊書房	５．総ページ数 352
３．書名 『〈言語社会〉を想像する：一橋大学言語社会研究科25年の歩み』うち「「言語社会」を想像する」(15-25)	

１．著者名 クロード・アジェージュ(訳：糟谷啓介、佐野直子)	４．発行年 2018年
２．出版社 白水社	５．総ページ数 357
３．書名 『共通語の世界史――ヨーロッパ諸言語の地政学』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	糟谷　啓介 (KASUYA Keisuke) (10192535)	一橋大学・大学院言語社会研究科・名誉教授 (12613)	
研究分担者	石部　尚登 (ISHIBE Naoto) (70579127)	日本大学・理工学部・准教授 (32665)	
研究分担者	佐野　彩 (SANO Aya) (10910523)	上智大学・外国語学部・研究員 (32621)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 LO JAPON RESCONTRA L'OCCITANIA : Difusion e variacion de la paraula PATOIS ; Espaci Occitan, Dronero	開催年 2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関